

「朝鮮語圏の文化／社会」の授業について

石坂 浩一

はじめに

一般教養としてふたつ目の外国語を学ぶことが、多くの場合通例となっている日本の大学では、それに伴い言語の背景にあるその地域の社会や歴史、文化についての入門的授業を実施している場合が少なくない。本学ではなぜか、そうした言語教育のバックアップにもなる授業が行われていなかったので、本年度からの試みは意味のあることと思う。とりわけ、近代以降はアジアよりも欧米を範として国家形成をし、社会の構成員自身がその影響を受けてきた日本においては、朝鮮や中国についての多面的な学習が欠かせないだろう。

2009年度、私は池袋キャンパスで前期に「朝鮮語圏の社会」を、後期に「文化」を担当した。新座では後期に「文化」の授業を専任のイ・ヒャンジン教授が担当した。ここでは主として私が担当した授業について報告し、成果や課題を考えてみたい。

授業の狙いと概要

ひとくちに「社会」「文化」といっても、この二つは相互に深く関連しているし、どこまでが「社会」で、どこからが「文化」なのか、判然としないこともあるだろう。言語ごとにこの二つの設定の仕方は多様に工夫されてしかるべきと思う。

朝鮮語の場合は、日本人が一般的に隣国の歴史をあまりにも知らないという現実をふまえ、「社会」は近現代史を、

「文化」は映画を中心とした文化そのものを扱うこととした。まず「社会」だが、「歌を通して考える近代史と社会」というタイトルを付けた。シラバスの授業の目標に書いたように「政治レベルから社会や人のレベルにわたる朝鮮民族のビビッドな営みを、歴史をふまえて理解する」ことをめざした。ただ、一般的に通史を講義しても面白くないし、授業時間も多くはないので、時期的には近現代、方法的には音楽、歌を通じての歴史理解をめざすことにした。これはいうまでもなく、歌詞についての説明が言語と関連してくるという点を意識している。

特に近年、韓国における歴史研究の進展はめざましく多様で、ジェンダーの側面などからみた前近代以降の社会史の成果は非常に興味深いものがある。これを日本史と比較・考察してみれば、高校までに往々にして型どおりの歴史教育しか受けられなかった学生たちにも面白いものとなると考えた。同時に、「韓国（朝鮮）は儒教の国だ」「韓国は反日だが台湾は親日だ」といった表面的な観察による俗説について、再考を促す狙いもあった。韓国において儒教的な権威主義が強化されたのは、1960年代から70年代にかけての韓国政府の強権的政治があったからであって、東アジア全体が元来儒教文化圏であることを視野に入れず、韓国・朝鮮を特殊な存在であるかのように見る考え方式に対し、異なる視点を示すことをめざしていた。

一方、私自身が2007年度から2009年

度にかけて全カリ総合教育科目の時事科目として「朝鮮半島と日本」を担当していたので、朝鮮半島の非核化や平和の問題はそちらにまかせることとした。また、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）については「朝鮮半島と日本」でカバーし、第二次世界大戦以降は韓国の政治社会史を扱った。

次に、後期の授業として行なった「文化」だが、これは「韓国映画を通して知る朝鮮文化」というタイトルをつけたように、韓国の映画に出てくるさまざまな素材を示しながら、前近代をある程度カバーしつつ、基本的には近現代の文化を幅広く伝えることを意図していた。当初の想定としては、たとえば映画〈酔画仙〉を通じて張承業、ドラマ〈風の絵師〉で金弘道や申潤福のような画家たちを伝え、前近代の朝鮮王朝の美術について図版を示しつつ語るのではないかと想定していた。

だが、結果的には韓国映画そのものの多面的な紹介とその意味、国際比較という内容にならざるをえなかった。その理由は、第一に学生たちのアジアについての一般知識が思いのほか乏しいように感じられあまり細かいところにまで踏み込むのがためらわれたこと、第二に丁寧に映像を示していると（学生は集中するのだが）ひとつひとつの映像に意外に時間を取られたこと、第三に映像を示す授業は、これまでも経験がなかったわけではないが、DVDが主流となった現在では意外にセッティングに時間がかかってしまったこと、などがあげられる。後述するが、学生たちの基礎知識が乏しいということがわかってきたので、あまり範囲を広げると授業内容の浸透に不安が感じられたのである。

そのかわり、韓国の映画産業・文化産業についての説明や韓国映画の最近の傾向といった現代的な部分を語るこ

とにした。この点は面白く聞いてもらえたのではないかと考えている。韓国の文化という時に、その歴史や個性にとどまらず、産業的な側面も含めて考察することは、学生たちの卒業後の方向性を考えるのに一助となるのではないだろうか。



学生の反応と今後の課題

「朝鮮語圏の社会／文化」を選択した学生は前後期ともに300名程度にのぼった。これは、丁寧に授業をするには、やはり多すぎる。一般教養の講義である限り朝鮮語選択者という限定をつけることはできないし、広く関心を喚起するという目的を考えれば、受講者が多いのは結構なことだが、限界が生じる。

前出の「朝鮮半島と日本」の場合、2007年度に授業内でのミニ・レポート論述や期末試験の際に、授業内容を正反対に受け止めているような記述があまりにも多かったので、私自身、相当に考えさせられた。そこで、2008年度からはほぼ毎回、授業で説明したことがらの中からひとつを選び、自分で書いて整理し、提出してもらうことにした。授業の最後の15分程度でこの課題を書き、私は翌週までに提出物を見て、誤解があれば指摘してコメントを付けて返却するという作業を行なった。これは受講者が約100名という規模だっ

たから可能であった。本来、学生たちが普段接していない、世間的にも知る機会が少なかったことがらを伝える場合は、こうした作業が重要になると考える。また、朝鮮半島の政治状況にかかわるシビアなテーマでもあったので、選択者もそれなりに考えて選択していたのだと思う。

だが、300名ではこの作業はできない。出席はとらなかつたので、登録者が300名でも通常の実数は250名程度。だが、丁寧に学生の理解度を点検できないまま授業を進めざるをえなかつた。そして、人数が多くなると私語もはなはだ多い。前期は3回、後期は4回のミニ・レポート提出を課したが、集中力に欠ける学生が少なくなく、教室に座っていても実は頭に入っていないという者もいただろう。

成績評価は数回のミニ・レポートと最終レポートで行なつた。ある程度予想していたことではあるが、内容がやさしそうに見える科目は、たやすく単位が取れるのではないかと期待してくる学生を生む結果になつたのだと思う。後期の成績評価はまだなのでおくとして、前期については提出物を出した学生でも内容が不十分であれば不合格とした。おそらく授業に出席していなかつたのだろう、授業で説明したことと正反対のことを述べて平然としている例が多く目についた。もちろん、異なる考え方があって当然だが、その場合は根拠をもって反論してもらわなければならない。提出物を出したのになぜ不合格なのか、という評価についての問い合わせが数件出たが、これについてはかなり具体的に、授業内容を踏まえていない内容であり、また記述内容が不十分だということを書いた。

ついつい否定的なことを先に書いてしまったが、講義内容を踏まえ興味深いレポートを出した学生も少なくな

かつた。少なくとも、近年の保守的な日本社会の風潮の中で、朝鮮・韓国についてのあまり接することがなかつた見方、考え方を知り、新しい知識を得る機会になつたことは学生たちにとって重要な成果と考えていいのではないかと思う。

もうひとつ、韓国の留学生の選択者が多かつたという点で、対応を考えていく必要がありそうだ。実は、前期の「社会」で、韓国人留学生から自分が受けたB評価に対して、おおよそ「韓国人なので韓国については知っているし提出物を出したのに、どうしてBなのか」といった問い合わせがあつた。この学生の場合、授業内容と正反対のことを平然と書いていた典型的なケースで、歴史的事実に反する記述であつたので、こうした評価にした。

自分の国、民族のことだから簡単に単位が取れるだろうという姿勢で登録する留學生が、特に在籍者の多い韓国や中国の場合には出かねないのかもしれない。だが、研究・教育する側はその対象地域における研究成果や社会動向を踏まえて授業をすることは当然なので、教育する側の主体性や工夫が求められるであろう。

授業の初め、基本的に教室の多数を占める日本の学生を念頭に置いて授業を行なう、と私は伝えている。基礎知識のない日本の学生にまず伝えていくということは、大前提にはかならない。しかし、留學生が授業登録することは近年当たり前になっているし、だからこそ日韓・日朝比較の視点を取り入れて、留學生が聞いても面白い授業になるように努めているつもりもある。私は留學生たちがもっと挑戦的にいろいろな議論を投げかけてくれれば面白いと思つているのだが、1990年代までとちがつて留學生たちも静かである。

むすび

2010年度からは言語Bの必修単位が1年次の4単位だけになるので、言語Bの外国語学習者をどのように導き、意欲を持たせられるか、重要な課題となる。そのためにも各言語圏の「社会」「文化」の充実は必須だが、一方で大人数の授業に対処しなければいけない悩みは続くと思われる。近年は履修単位上限が設定され合理的な授業登録が促さ

れているが、履修単位の見直しには至っていないようだ。これからは、履修単位を減らすことで、掘り下げた学習を促し、大人数授業の弊害を解消することでも本学のみならず社会的に議論される時に来ているのではないかと、いう個人的印象を持っている。

いずれにしろ、初年度の授業をもとに、一層の充実した教育に努めていきたい。

いしざか こういち
(本学異文化コミュニケーション学部准教授)